

いずみ保育所の今

子ども発達教育研究センター 松永 聖子

レースのカーテンの向こうに青い空が見える。生活科学部棟のレンガがくつきりと浮かび上がっている。子どもたちのやわらかい寝息と、布団を通して伝わってくるあたたかさ。午後一時過ぎはお昼寝の時間だ。

午前中、保育室内はおままごと、おえかき、ふざけっこ、さまざまな名前のつけきれない遊びの中で、にぎやかなお話の声や笑い声。泣き声であふれていた。お昼ご飯には、いろいろなメニューのいいにおい、食器のふれ合う音。そんなものでいっぱいだった。お昼寝の静けさの中で、小鳥の音が聞こえる静けさの中で、それらのにぎやかさは、保育室の壁や床、畳、テーブルやいす、絵本やおもちゃのひとつひとつにしみ込んでいつているような気がする。



お昼寝の子どもたち

第三号の特集で本田学長が触れていらした学内保育所が、ここ、いずみ保育所である。子育てをしながら本学で学ぶ学生・院生と、勤務する教職員の子育てを支援しようと、二〇〇二年一〇月に附属幼稚園の一室を改修して開所した。対象は、生後六

ケ月から満三歳未満児で、定員は六名で、保育士三名が保育にあたり、学生を中心としたボランティアにもお手伝い頂いている。保育時間は月（金）の一〇・三〇～一六・三〇で、月極保育のほか時間預かりも行っている。現在の利用者は、大学院生、聴講生、科目履修生、教員のお子さん、〇歳児一名、一歳児四名、二歳児四名、三歳児二名となっている。利用の曜日や時間帯はさまざまである。学内に保育施設がほしいという声はかなり古くからあったというが、具体的に動き出したのは、学内の有志の先生方が集まり、まずは授乳のためのベビールームを作ろうと動き出した一九九九年からのことだそうである。本田学長のリーダーシップで、二〇〇一年にベビールーム開室、二〇〇二年にようやく保育室の開所となった。



午前のお遊び、外からは附属幼稚園の元気な声も

お昼寝から覚めたら何をしよう・・・？午後も、子どもたちには無限大の世界が広がっている。

ドア一枚隔てた附属幼稚園でも、子どもたちが無限に豊かな世界で活動している。生き生きとした話し声、世界の広がりを感じさせている。その新鮮な世界から、さつと風が入るような瞬間がある。おそろのおそろのドアからのぞいて、赤ちゃん来てますか？と聞いていく男の子の声、玄関ホールで泣いている保育所の子どもの涙を、自分のハンカチでそっと拭いていく女の子の目の色などに触れるときだ。今日は、もうお帰りの時間のようだ。



お片付けの後みんな揃ってお昼ごはん

子どもたちが午後へのパワーを蓄えている間に、私たちが、半日の保育を振り返って、保育パワーを蓄えることにしよう。

大学の暦（平成十五年四月）

- 四月 九日 大学入学式
- 四月十五日 前期授業開始
- 学生定期健康診断開始（十八日）
- 七月二〇日 大学見学会

編集後記

厳寒の日々が去り、木々の芽生えのときに、本号をお届けします。前号の発行からまだ日が浅いのですが、現在本学が置かれている状況を反映して、お知らせすべき多彩な話題に事欠きませんでした。本学の行方に関しては、学長からのメッセージを継続的にお届けしています。また、前号でも取り上げたアフガニスタン教育支援に関し、更なる展開があり、二人の方に寄稿して頂きました。さらに、総合研究棟1号館が完成しました。その詳細は施設課からのレポートをお読みください。この建物は、大学院と学部とが一体となつて研究活動を行う拠点として建てられたもので、一号館は生活科学部との関連が深く、同学部の紹介および表紙の写真と併せての小特集です。研究室紹介では、ソフトマターとよばれる物質がテーマです。身近な物質でありながら、その奥深さを探求すれば先端研究に至ります。最後は、活動を始めた保育所の現状紹介です。

小紙は、社会の中の大学、の姿を映し出すというささやかな試みです。ご意見、感想など、お寄せください。

（編集長 柴田）

本誌に関するご意見・ご要望、記事の掲載などは、企画広報室にお寄せください。

お茶の水女子大学広報誌 Tea Times
平成15年4月15日発行
編集発行/お茶の水女子大学広報委員会

編集/柴田 文明（編集長 理学部）
福島 昇（編集事務 企画広報室）
問い合わせ先/お茶の水女子大学企画広報室 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL 03-5978-5105 FAX 03-5978-5890
E-mail info@cc.ocha.ac.jp URL http://www.ocha.ac.jp/

印刷 昭和堂